

# アメリカ進歩主義教育における講堂の活用の目的と実際

— 1910年代ニューヨーク市の学校改革を中心として—<sup>1</sup>

佐藤 隆之

## はじめに

1917年にニューヨーク市教育委員会の調査研究課 (Division of Reference and Research) は、『学校集会—講堂における活動のためのハンドブック (*The School Assembly: A Handbook for Auditorium Exercises*)』という小冊子を刊行した。タイトルが示すようにそれは、学校の講堂を活用した集会活動を実践に移すための手引きである。19-20世紀末転換期にニューヨーク市では、都市化や移民の流入などによる就学者数の増加を背景として、大規模校舎が数多く建てられ、その中には、やはり大規模な講堂が設けられた。そのため、新たに出現したこの講堂をどう活用するかということが、切迫した教育問題の一つとなっていたのである。それにくわえて講堂は、当時推進されていた進歩主義教育を背景として、学級や教科を超えた、より大きな集団での活動を通して、自己や社会を形成する新たな手段としても期待された。『学校集会』はそのような問題や期待に応えようとする一つの成果であった。

本稿の目的は、アメリカ進歩主義教育の中で行われた講堂を活用した教育について、その目的や実際を考察することにある。それにより、校舎を含めた学習環境の改善にとくに力を入れた、アメリカ進歩主義教育における学校やカリキュラムの改革に関する理解を深めることをめざす。

考察の方法としては、1910年代のニューヨーク市での学校改革をとりあげる。当時同市は、インディアナ州のゲーリー市でワート (William Wirt) によって推進されたゲーリー・プランの導入を契機として講堂の時間が積極的に活用され、『学校集会』をはじめとするいくつかの成果をあげていた。まずは『学校集会』に注目して、ニューヨーク市における講堂活用の目的や、それを実現しようとした取り組みを概説する。次にニューヨーク市で最初にゲーリー・プランを導入したブロンクスの公立学校における講堂の活用を対象として、その目的や活動の実際について考察する。最後にそれをふまえて、ニューヨーク市においては、講堂活用の四つの目的に合わせて、講堂という空間を、教会、劇場、コミュニティ、ミュージアムなどに見立てた学習環境とすることによる学校改革が構想されたという解釈を提起する。

これまで講堂の活用については、それを積極的に推進したゲーリー・プランに関する研究の中で言及されることが多かった。その中の一つにおいて、講堂での活動は、「ワートの計画の核心」であり (Cohen 2002: 16)、「重要なプログラム」であったと評価されている (Cohen 2002: 42)。本稿で取り

上げるニューヨーク市におけるゲーリー・プランの実験に関する研究は枚挙に暇がないが<sup>2</sup>、その中でも講堂の活用について言及されることがある。宮本は、ニューヨーク市におけるゲーリー・プランの導入の中心となったバロウズ（Alice Barrows）の「劇場としての講堂」論に注目して、講堂が伝統的な教育を改革する拠点とみなされたことを明らかにしている。それによると、講堂には、学習課程の制約を受けない学習活動が行える、社会的な活動が可能である、創造的表現の場になる、学校と地域の結節点になる、といった多様な機能が認められていた（宮本 2011: 20-21）。

このような先行研究をふまえて筆者は、特定の学級・学年・教科などが固定されず、学校内外に開かれている講堂の中立性、公共性、非形式性、非日常性といった特性を生かしたカリキュラム改革が構想されたことを明らかにした（佐藤 2013）。本稿はその考察をさらに深め、講堂という空間を活用して、アメリカ進歩主義教育の理念を、社会性や市民性の育成、教えと学びの改善、コミュニティと結びついた学校といった諸点において実現しようとしていたとことを論じる。

## 1. 講堂における集会活動の実際

### 1.1. 『学校集会』における講堂活用の目的と実践

1910年代にニューヨーク市で講堂の活用が問題となった背景には、ワートによって推進された学校改革が、1915年2月から同市に導入されたことがあった。1906年にゲーリー市の教育長に就任したワートは、児童生徒をいくつかの集団（プラトゥーン [小隊]）に分け、各教室での教科の学習と、体育館・工作室・運動場・講堂などでの「特別活動」を交互に行うことにより、校舎の有効活用や、活動的で社会的な学習に重点をおく改革に取り組んだ。これが「ゲーリー・プラン」とか「プラトゥーン・プラン」と呼ばれ、1910年代に脚光を浴びた。

ニューヨーク市に導入されることになったゲーリー・プランでは、「特別活動」の一つである講堂の活用にとくに力が入られたことは先に述べた通りである。講堂プログラムの原点は、1909年末頃に、「高校の文芸クラブの生徒二人が……文学に関わる、音楽、暗唱、ディベート、その他のエンターテイメントなどを毎月発表し始めた」ことにあるとされる（Cohen 2002: 16）。教育課程に「講堂の時間」が設けられるようになったのは1911年頃とされる（Rossman 1924: 103）。その後、「1913年の秋学期開始前から、講堂の時間という重要なプログラムが開始された」（Cohen 2002: 42）。

講堂の時間は1913-1914年度から本格的に実施されるようになったと考えられるわけだが、ちょうどその頃の1914年に連邦教育局が主体となって、ゲーリー・プランに関する報告書が公開され、同プランは全米で注目を集めるところとなった（Cohen 2002: 28）。このような流れの中で、ゲーリー市同様、就学者数の激増にともなう校舎不足の問題を抱えていたニューヨーク市がゲーリー・プランの導入を決断した。それに伴い、ゲーリー・プランの講堂の活用に対する関心も高まったわけである。

ニューヨーク市におけるゲーリー・プランに基づく学校は、「二重学校（duplicate school）」と呼ばれた。表1は、1915年の2月にニューヨーク市で初めてゲーリー・プランを導入した、第45公立学校の日課である。それをみると、児童を二つに分けて「X校」と「Y校」とし、たとえば8時30分

始まりの1時間目では、X校は教室で算数を、Y校は教室以外の場所で「特別活動」に取り組んでいる。このように、一つの校舎に同じプログラムの学校が併存することが、「二重学校」という名称の由来である。表中の1～4という数字は、「特別活動」のために全児童生徒を学年に準じて分けた4つのグループをさす。表の塗りつぶし部分は、「特別活動」とその中の「講堂」を活用した時限及びグループである。『学校集会』では、その二重学校における講堂教育の目的とそれを実現するための実践の一部が、四つに分けて論じられている。

表1 第45公立学校の日課  
(Taylor 1916b: 9を基に筆者作成)

		X校				Y校				
時限	教室での活動	特別活動				教室での活動	特別活動			
		講堂	遊び	特別学習	教会・家庭・遠足		講堂	遊び	特別学習	教会・家庭・遠足
1	8:30	算数					1	3	2	4
2	9:10	言葉					3	1	〃	〃
3	9:50		1	3	2	4	算数			
4	10:30		3	1	〃	〃	言葉			
5	11:10	昼食				読み				
6	12:10	読み					昼食			
7	1:10	歴史					2	4	1	3
8	1:50	地理					4	2	〃	〃
9	2:30		2	4	1	3	歴史			
10	3:10		4	2	〃	〃	地理			

第一の「精神的機能 (inspirational functions)」は、「協同、チームワーク、グループ全体の活動への貢献や参加という理念」を身につけ、社会性を育成することを目的とする (Nifenecker 1917: 6)。とくに学校全体を一つの集団として形成するために「団結心」や「愛校心」を養うことが重視された。その上で、「社会的連帯」、「道徳性」、「道徳的発達」、「社会的徳」などを育成することが説かれている (Nifenecker 1917: 6-7)。

第二の「レクリエーション的機能 (recreative functions)」は、「より高い次元における喜び (pleasure) やくつろぎ (relaxation)」を与える機能とされる<sup>3</sup>。この機能はデューイに言及して論じられている。デューイによると、レクリエーションは、最も強く根源的な人間の本性でありながら、学校では軽視されたり無視されたりしてきた。レクリエーションの道徳的影響を正しく理解して指導することは、コミュニティの義務とされる (Nifenecker 1917: 7-8; Dewey 1902)。

このレクリエーションを実際に重視した実践例としては、ニューヨーク市マンハッタンにある私立学校エシカル・カルチャー・スクールの学校祭や劇が紹介されている。「レクリエーションとなり精

力を回復させる余暇活動」として、そのような学校祭や劇を、講堂を活用して行うのがレクリエーション的機能の典型とみなされた（Nifenecker 1917: 8）。

第三は「解釈的機能（interpretive functions）」であり、「社会が現状を維持していく過程に対する洞察力、すなわち、自分がおかれた環境に対する見方」を養うことを目的とする（Nifenecker 1917: 9）。この機能の手段としてとくに力が入られたのは「外部講師」であった。『学校集会』の付録として、「ブロンクスの第42公立学校の講堂において講演を行った外部講師氏名」一覧が掲載されている（Nifenecker 1917: 105-106）。同校は二重学校の一つであったが、その一覧には、外部機関として、メトロポリタン・オペラハウス、市の健康局、メトロポリタン美術館、ニューヨーク動物園、水道・ガス・電気局、アメリカ自然史博物館、学校芸術連盟<sup>4</sup>、ニューヨーク市警、マンハッタン職業学校などが記されている。様々な機関から講師を招くことにより、学校の外に広がる複雑な社会の動きや環境について、具体的かつ多面的に「解釈」する機会が与えられた。それにより、社会に対する関心や理解を深めてその一員に育て上げることがめざされた。

最後の第四は「教授的機能（instructional functions）」であり、教師が児童生徒に対して行う教授活動全般を指す。この教授的機能の手段としてとくに推奨されているのが、幻灯機を用いたスライドや映画などによる視覚教育である。「集会で提示するのに適した有益な情報源は無数にあるとってよい」とされ、「現代史、市政、家政、個人の衛生、科学、芸術、旅行など、楽しく習得できる話題であるなら何でも集会プログラムに含められる」と指摘されている（Nifenecker 1917: 10）。講堂は集会を行う主たる場所であったが、集会で取り上げられる内容は、その「情報源は無数」であることから多様であり、様々な教科に適用可能と考えられた。それゆえに、講堂での学習は、通常の教室における教科を中心とする学習に生かすことができるとされた。また、講堂を中心とする集会での学習は、「楽しく習得できる」とされる通り、先にみた「レクリエーション的機能」も期待された。講堂における幻灯機の活用により、画一的になりがちな教授を改善し、学習に喜びや楽しさを与えることがめざされたのである。

## 1.2. 二重学校における講堂の目的と活動

二重学校方式による第45公立学校の再編に関する報告書には、日課の中で講堂の時間がどのような位置を占めていたのかが言及されている。表2をみると、最上級学年である8年B組男子の日課においては、9時50分から10時30分までの3時間目（表中の塗りつぶし部分）に、講堂での学習に取り組んでいる。この時間は3名の教師が指導に当たった。1時間目に歴史を担当したコンドンが責任者となり、2時間目に地理を担当したメイヤーズがピアノを担当したほか、集会の歌を指導する教員がいた。活動内容としては、合唱の後に、8年A組の女子が書いた物語の劇化に取り組んだ。劇化は荒削りだが、子どもたちのアイディアで行われ、教師の指示に従うだけではなかったという（Taylor 1916a: 18-20）。

表2 第45公立学校8年B組男子の日課  
(Taylor 1916a: 18-20 を基に筆者作成)

時間	場所	担当教師	学習活動
1限 8:30 — 9:10	412 教室	Joseph H. Condon	歴史
2限 9:10 — 9:50	304 教室	Julius W. Meyers	地理
3限 9:50 — 10:30	講堂	Condon (責任者), Meyers (ピアノ), Patrick (歌)	劇の制作
4限 10:30 — 11:10	運動場	John Molly, Harold N. Lefkowitz	遊び
5限 11:10 — 12:10	昼食		
6限 12:10 — 1:10	304 教室	Meyers	読み
7限 1:10 — 1:50	304 教室	Meyers	言葉
8限 1:50 — 2:30	310 教室	Alfred Rado	算数
9・10限 2:30 — 3:50	作業室, 理科室, プロ ンクス公園	理科室: William Jansen 工作室: Benjyamin Baumritter	特別活動

1916年2月からは第45公立学校に加えて5校でも二重学校方式が採用された (Taylor 1916b: 5)。その報告書によると、二重学校では英語、算数、歴史、地理といった主要教科は従来通りのやり方で教えたが、工夫したところが二点あった。一つは「教科専門制 (departmental system)」をとったところ、いま一つは「講堂での活動 (auditorium exercises)、遊び、工作室での活動で補完されている」ところであった。後者の「講堂での活動、遊び、工作室での活動」は「特別活動」と呼ばれ、それにより言葉による教授中心の学校を、「主体性、動機、応用、自助を重視する学校」とすることがめざされた (Taylor 1916b: 8)。

ゲーリー・プランが導入された6校ではいずれも、特別活動の一つとして講堂の時間が実施された。一コマ50分か40分で、講堂に集まる学年は、低学年4学年と高学年4学年に分ける学校、1年生から8年生まで全学年が集まる学校、2学年ごとに集まる学校などがあった (Taylor 1916b: 14-15)。

講堂の標準的な設備についても記されている。グランドピアノ、引き出し付きの檜の木の机、教師の机、幻灯機のスライド用引き出し付きキャビネット、立体写真用キャビネット、可動式黒板、ポールに付けられた国旗、パテスコープ [フランスの映画企業家パテによる映写機 ([ ] 内は筆者による補足、以下同様)] あるいはその他の映写機、幻灯機、幻灯機用スライドや写真それぞれ1000枚、立体鏡 [三次元映像を見るための眼鏡] 48個、ビクターラ [ビクター製蓄音機]、レコード、パテスコープ社が週に三巻提供する映画、可動式コート入れ、ロール式スクリーン、聖書用スタンド、譜面台、可動式椅子1ダース、などが講堂には装備されていた (Taylor 1916b: 10)。

典型的な活動例として紹介されているのは、①音楽と文学、②音楽と地理、③音楽と倫理、④音楽と歴史、⑤音楽と衛生、⑥音楽と理科、⑦音楽と時事、⑧音楽とレクリエーションという8つの異なる活動のサイクルを繰り返すというものである (Taylor 1916b: 10-11)。すべて音楽と組み合わせられているのは、講堂の時間にはまず合唱が行われたからである。音楽に続くそれぞれの具体的な活動は

表3「講堂の時間における活動の種類と学習の内容・方法」の通りである。この表3から、講堂において実際にどのような学習活動が行われていたかを知ることができる<sup>5</sup>。

表3 講堂の時間における活動の種類と学習の内容・方法  
(Taylor 1916b: 10-14)

活動の種類	学習の内容・方法
(1) 文学	教師による学習と児童による学習の二つに分かれる。 ・教師によるものとして、シェイクスピアの劇、イリアッド、古典的な神話、グリム童話、キプリングの動物物語などからなる『なぜなぜ物語 (Just So Stories)』(1902)のような代表的な文学作品に関する講義や話し。 ・児童によるものとして、児童の作文を読む、暗記用を選んだ作品の暗唱、朗読、劇。 ・ある学校では1学期間に16の劇を行い、182名の子どもが何らかの役を演じた。また、すべての休日については、講演か劇、あるいは両方を行って祝った。
(2) 地理	教師や児童による講演、スライド・映画の活用、調べ学習の成果をまとめたオリジナルの作文など。
(3) 倫理	倫理に関わる話しを行う。主たる教材は、(a) シェッドロックの『話し手の技法』、(b) アンデルセン物語、(c) トルストイの作品、(d) 『ゴールデン・ルール』シリーズ、(e) ボールドウィンの『50の有名な物語』、(f) 『アメリカのすばらしい出来事』、(g) シャターの『美術・文学読本』、(h) プライアントの『子どもに聞かせたい物語』、(i) カボットの『子どものための倫理』。
(4) 衛生	・清潔、姿勢、その他の類似のトピックスに関する実践的な講義。ニューヨーク市の衛生局から生徒にパンフレットが配布され、それを生徒は家に持ち帰って保護者に渡す。 ・上級学年には、医師や看護婦が講演。トピックスとしては、体の健康、歯のケア、よい姿勢、よい服装、目のケア、「赤ちゃん週間」、「蚊週間」など。
(5) 歴史と公民	・学内外の講師による講演。a. 警察署、消防署、共同住宅局、b. 教育委員会の電気局、c. 市会議員委員会、d. ニューヨーク電話会社、e. 児童虐待防止協会、f. 貧困者状況改善協会、g. 学校の機械工作室、h. 手工室。 ・ある学校では、公民について、州の上院議員ハミルトンが4回講演。下院議員も4回講演。別の学校では週一回講演が行われ、市の各局、私的組織、公共サービスの組合などの代表者が講演。
(6) 理科	・実験室で教えたことについて、図を見せながら講義する。 ・自然学習では学年ごとに次のような講義が行われた。1年生：猫、犬、馬、牛。2年生：ふくろう、らくだ、馬、牛。3年生：虎、ライオン、水牛、蜂。4年生：蜘蛛、二枚貝、カキ、亀。5年生：海綿動物、真珠、蚊、ハエ。6年生：カイコ、ハエ、蚊。
(7) 時事	ある学校では、パナマ運河の建設、新聞制作、電気メッキの過程、橋の建設、ヨーロッパの戦争などについて、写真や映画などで実例を示しながら講演が行われた。特別な記念日には、それに合わせた講演が行われた。たとえば、リンカーンの誕生日にはリンカーン記念碑〔ワシントンD.C.にある碑〕についての講演が、写真を見せながら行われた。
(8) レクリエーション	多くの学校で子どもたちはフォークダンスをステージで披露する。また、あらゆる種類の劇も発表する。劇の多くは子どもたちが書いた。
(9) 音楽	・音楽の理論は教室で専門家によって教えられ、講堂で合唱が行われる。通常は講堂担当教師の一人が担当する。 ・ある学校では、各学年で歌を歌う。コンサートも行われる。デュエット、トリオ、カルテット、合唱、ヴァイオリン、チェロ、チター〔南ドイツ・オーストリアの伝統的楽器。30本以上の弦がある。〕などの様々な楽器を演奏する。蓄音機でのコンサートを行う。子どもたちはレコードをたくさん借りる。メトロポリタン・オペラハウスのアーティストによるオペラもかけられた。

## 2. 講堂からの学校改革構想—学習環境としての講堂の機能

### 2.1. 教会としての講堂—「精神的機能」

1910年代のニューヨーク市における学校再編の中では、以上のようなかたちで講堂が活用されていた。『学校集会』はそれに基づき、講堂活用の目的を四つに分け、その目的を実現しようとする試みを紹介することをもって、講堂における集会活動の指針を示そうとするものであった。その理論と実践を総合的に分析すると、二重学校においては、進歩主義教育運動の影響を受けつつ、四つの目的の視点から講堂という空間を、「教会」、「劇場」、「(萌芽的) コミュニティ」、「ミュージアム」に見立てた学習環境として、学校改革の拠点とすることが構想されていたと推察される。この仮説を、先にみた表3「講堂の時間における活動の種類と学習の内容・方法」に示された諸活動に注目して提起する。

まず「精神的機能」からみると、『学校集会』では、この機能のためには大人数の存在や関わりが必要であり、そのために「古代にはアゴラやフォーラムがあり、私たちには教会や会合室がある」と指摘されている（Nifenecker 1917: 7）。ここでは講堂に匹敵する空間の一つとして、教会があげられている。

これに関して、19-20世紀末転換期のニューヨーク市における学校建築について考察したコーエン（Michele Cohen）は、講堂は宗教的な空間であり、そこで行われる集会が道徳教育の機能を果たしたとしている。そう考えられる根拠の一つとして、『学校集会』がとりあげられている。『学校集会』では集会を活用して社会的連帯感を育成することが説かれているが、その際、集会を「学校という家族の祭壇」（Nifenecker 1917: 70）と呼んでいる。そこに注目してコーエンは、講堂は神聖なる空間であり、そこで行われる活動は宗教性を帯びていたとし、「集会はゲストスピーカーや旧約聖書を読むことを通して道徳教育を強化する」と主張している。そもそも19世紀末に建てられた講堂は宗教的空間にふさわしいデザインとなっており、「宗教的色彩が濃いところに最大の特徴がある」とも指摘されている（Cohen 2009: 41）。それにより講堂の活動は、宗教教育を軸とする道徳教育に寄与したというのである。

講堂が宗教的空間であったといっても、文字通り講堂が教会であったというわけではない。公立学校における宗教教育は禁じられていた。ここで指摘されているのはあくまでも比喩的な意味においてである。

このようにみえてくると『学校集会』でいう「精神的機能」における社会性の育成とは、移民の増加や都市化などにより急増していた多様な就学者を、宗教の力も借りて、学校の一員、さらには、ニューヨーク市民、アメリカ国民へと形成することも含意していたと推察される。講堂は学校にそのような学習環境を用意する一つの手段であった。

## 2.2. 劇場としての講堂—「レクリエーション的機能」

「レクリエーション的機能」については、表3の活動(8)「レクリエーション」が直接対応しており、フォークダンスや劇の発表が実際に行われていた。劇については、活動(1)「文学」でも、教師がシェイクスピアの劇について話したり、多くの児童がいくつもの劇を発表したりしている。その他に、活動(7)「時事」ではその時々の記念日の祝典が行われ、活動(9)「音楽」では、メトロポリタンのアーティストによるオペラを聴いた。

この「レクリエーション的機能」の実践例として紹介されていたエシカル・カルチャー・スクールの校長チャップ(Percival Chubb)は、「喜び」<sup>6</sup>のある学校教育とする必要性を説いている。チャップは、「私たちの教育は脳には関わるが、感情を枯らせている。手には関わるようになっているが、心、想像力、子どもの創造的で演劇的な本性は軽んじられている」と指摘している(Chubb 1912: xix)。そのような反省から「喜び」を与える教育を主張し、そのために「洗練された、人を活気づける(recreative)余暇」を重視した(Chubb 1912: 5)。それが『学校集会』において、講堂が「レクリエーション的機能」を果たす事例の一つとして言及されていたのである。

チャップによると、「喜び」を重視してレクリエーションに力を入れた教育は、ニューヨーク市におけるハーツ(Alice M. Herts)の『子ども教育劇場』(Herts 1911)<sup>7</sup>において実践されていた(Chubb 1912: xix-xx)。ハーツは劇が子どもの人格形成に重要な役割を果たすという理解のもと、子どもによる劇の制作や発表を中心とする活動を1903年から指導していた(Herts 1911: xi)。

ハーツによるこの実践は、子どもが元来有する演劇的本能が、その当時台頭していた新教育運動の中で十分に活用されていないことに対する批判を背景としていた。「アメリカにおいて劇場は、大きな教育運動の一部であるとは認識されてこなかった」というのである(Herts 1911: 2)。子どもの演劇的本能は、映画館や安いボードビルショウに子どもを引き寄せ、利益をあげるために商業的に利用されるばかりで、教育者には有効活用されてこなかった(Herts 1911: 2-3)。そのような反省のもと、子どもの生来的な演劇的本能を新教育運動の一環として活用し、街中の商業的な劇場に対抗する試みが、「子ども教育劇場」であった。

「子ども教育劇場」の活動は、ニューヨーク市の教育連盟(Educational Alliance)<sup>8</sup>が所有する900名収容の講堂で行われた。写真1と写真2は講堂で『白雪姫』を上演しているところである。写真1は舞台、写真2は観客席を写したものである。

ハーツはこの講堂を、劇場としての教育的に活用しようとした。これを劇場としての講堂と呼ぶとすると、それは講堂の「レクリエーション的機能」を軸として、新教育の理念を実現するための学習環境を用意することをめざすものであったと推察される<sup>9</sup>。

## 2.3. コミュニティとしての講堂—「解釈的機能」

「解釈的機能」については、活動(4)「衛生」においてニューヨーク市衛生局と連携した活動や、医師や看護婦の講演が行われていた。活動(5)「歴史と公民」では警察署や消防署などと連携したり、





写真1 『白雪姫』（1905年）  
（Herts 1911: 30）



写真2 劇『白雪姫』の観衆  
（Herts 1911: 72）

活動(9)「音楽」では近隣のメトロポリタン・オペラハウスで行われたオペラを聴いたりした。

このように講堂における地域の機関や施設と連携したプログラムに関してデューイは、娘エヴリンとの共著『明日の学校』の中で、講堂の活用にも言及しながら、二重学校が依拠しているゲーリー・スクールを評価している。ゲーリー・スクールは、学校を「萌芽的コミュニティ (embryo communities)」とする試みであったというのである (Dewey and Dewey 1915: 174)。

ここでいわれる「萌芽的コミュニティとしての学校」とは、コミュニティが「学校を活気あるものとする」役割を果たしている学校とされる。すなわちそれは、「コミュニティの精神と関心を発展させる社会的学校」であり、文字通り実際のコミュニティへと発展する芽としてコミュニティと結びつけられている学校である (Dewey and Dewey 1915: 174-175)。この「萌芽的コミュニティとしての学校」の実践例として紹介されているのがゲーリー・スクールである。

デューイらは、子どもやコミュニティ全体に関わる問題を取り上げ、学年を超えて全校で取り組む「キャンペーン」という活動が行われたことに注目している。その一つ「健康キャンペーン」においては、健康に関する規則について学ぶべく、校医を中心として、主に英語の授業と「講堂の時間」を使って活動が行われた。活動の中で扱う病原菌や生理学については、化学や料理などに関連づけられて学んだ (Dewey and Dewey 1915: 186-187)。英語の時間では、美術と関連づけて、学習の成果をポスターやパンフレットにして印刷し、周知できるようにした (Dewey and Dewey 1915: 196)。講堂では、主に健康に関する講義や講演が行われたと推測される。

このように「健康キャンペーン」は、通常の授業（ここでは英語、化学）や特別活動（ここでは講堂の時間、印刷、料理）を組み合わせた総合的な学習活動であった。この「キャンペーン」活動において学校は、近隣のコミュニティと結びつけられながら、一つのコミュニティとして全体で課題に取り組んだ。家庭と連携したコミュニティの改善も試みられた<sup>10</sup>。総合的な学習活動では、先にみた「レクリエーション的機能」の説明で言及されていた、コミュニティには学校教育に喜びをもたらす義務があるというデューイの主張を実現しようとしている。

この「キャンペーン」活動は、学校を「萌芽的コミュニティ」とするための仕掛けの一つであった

が、その有力な手段として言及されているのが「講堂の時間」である。講堂の主たる機能としては、「世論の形成」があげられている。合唱、学習成果の発表、「料理」における栄養のある食事という共通の問題の解決など、共同や共有をともなう活動・発表を講堂で行うことをとおして、「仲間意識」や「世論」を形成するというのである。「健康キャンペーン」でいうなら、講堂の時間を使って、学校全体で健康の意義を共有し、健康であろうとする意識を醸成することがもくろまれたと考えられる（Dewey and Dewey 1915: 196）。

また、「講堂の時間はコミュニティ一般にも利用される」のであり、「牧師、政治家、興味を惹くようなことをした市民の誰もが学校に来て、子どもたちに話しをする」機会でもあり、「学校はこのような方法で近隣のすべての社会機関を招き入れる」と指摘されている（Dewey and Dewey 1915: 196）。

総じて講堂は、学級や学年を超えて学校を一つのコミュニティとし、また、学校とコミュニティを結びつけて学校を実際のコミュニティに近づける一手段とみなされた。これを講堂の「解釈的機能」という観点から言い直せば、講堂が近隣のコミュニティの一部を体現したり、学校の中にコミュニティを形成する拠点となったりすることにより、子どもが社会について、より真に迫った解釈をし、理解を深めて、その成員となることができる学校改革がめざされたと考えられる。

#### 2.4. ミュージアムとしての講堂—「教授的機能」

最後に「教授的機能」をみると、活動(2)「地理」、活動(6)「理科」、活動(7)「時事」などで、写真、スライド、映画などが活用された。スライドや映画は既に多く作成されており、とりわけアメリカ自然史博物館はニューヨーク市を代表するスライド製作機関の一つであったとされる（Crandall 1922: 320-321）。公立学校への幻灯機用スライド及びフィルムの貸し出しや、それを用いた授業の支援にも積極的に取り組んでいた。『学校集会』には、同博物館公教育課が発行した、ニューヨーク市公立学校教員向けの案内が掲載されている。そこには、①地理、歴史、自然科学、産業に関する講義用スライドが2万枚以上ある、②教育委員会も関与している、③学校に無料でスライドを送り届け、貸出期間が終わる頃に取りに行く、④スライドのカタログを送付できる、⑤発注用紙も送付できる、⑥スライドの予約を受け付けている、⑦スライドを用いた10の講義が用意されている、⑧詳細は公教育課のキューレーターに問い合わせできる、といったことが記されている（Nifenecker 1917: 17）。

スライドには地理や動植物などを含む自然科学全般にくわえて、安全、産業、歴史、美術なども含まれており（①）、「本ミュージアムのスライドコレクションはおそらく国内随一である」とされるほど充実していた（Nifenecker 1917: 18）。②から⑧にはスライドの借用法や内容が記されており、学校が借りやすいように様々な便宜が図られていたことがわかる。ニューヨーク市教育委員会の支援を受けて（②）、博物館の配送係が、ニューヨーク市内の学校であるなら希望すればどこでも、無料で配送・回収した（③）<sup>11</sup>。

「スライドを用いた10の講義」（⑦）は「特別講義セット」と呼ばれ、60から100のスライドを

使って約1時間の講義が行える原稿が用意されていた<sup>12</sup>。写真3は、自然史博物館にある講堂で通常プログラムとして行われていた講演である。公立学校の児童生徒が、スクリーンに映し出されたスライドを見ながら講演を聞いている。「特別講義セット」は、これを学校でも実施してほしいという教師からの要望に応えたものであった（The American Museum of Natural History 1916）。講演を行う講師の派遣も行っていた（Nifenecker 1917: 19）。「特別講義セット」は、ミュージアムの講堂で行われた講演を、学校の講堂で再現する試みであったといえる。



写真3 博物館の講堂における公立学校向け講義（Sherwood 1927: 330）

自然史博物館以外にも、間近にあるメトロポリタン美術館が同様の支援体制を整えていた。『学校集会』においてメトロポリタン美術館は、次のように紹介されている。1万7千もの幻灯機用スライドを所有しており、同美術館所蔵の作品だけではなく、その他の場所にある建築、彫刻、絵画などの著名な芸術作品を網羅している（Nifenecker 1917: 19）。その膨大なコレクションには、「1. エジプトや古典的なアートを含む古代の美術品」、「2. 極東芸術—中国や日本のアート」、「3. 近東のアート—ペルシャ、インド、小アジア」、「4. 西洋のアート—イタリア、スペイン、オランダ、イギリス、フランドル地方、フランス、アメリカなど」がある。教師に対するサービスとしては、学校で見せるスライドの選択や使用に関して助言したり提案したりする他、校長の要望を受けて学校に講師を派遣してスライドを用いた講演を行った（Nifenecker 1917: 20）。このように自然史博物館同様、メトロポリタン美術館も、ニューヨーク市の公立学校に対する支援に積極的であった。同美術館の貸し出しに関する取り決めも、『学校集会』の付録に掲載されている（Nifenecker 1917: 103）。

このように近隣にあるミュージアムとの連携により、講堂にミュージアムのような学習環境を創出することがめざされた。それにより学校における教えと学びを改善しようとしたのが、講堂の「教授的機能」の一つであった。

## おわりに

以上、本稿では、1910年代のニューヨーク市でゲーリー・プランの導入を契機として推進された、講堂の活用の実際的一端を明らかにした。その取り組みの成果である『学校集会』に注目して、ニューヨーク市における講堂活用の目的は、①精神的機能、②レクリエーション的機能、③解釈的機能、④教授的機能の四点にあったことや、それを実現しようとした試行の一部について明らかにした。また、ニューヨーク市で最初にゲーリー・プランを導入したブロンクスの公立学校再編を取り上げて、日課における講堂の時間の位置や内容、講堂の活用による主体的で動機づけられた学びの実現、特別活動の一つとしての講堂の時間の概要（授業時間、学年のグループ化、典型的な活動例）などについて論

及した。それをふまえて、1910年代のニューヨーク市においては、講堂活用の四つの目的に合わせて講堂を、教会、劇場、コミュニティ、ミュージアムなどに見立てて活用する学校改革が構想されていたことを、仮説的にはあるが提起した。それに基づき、講堂という当時あって新奇で特異な空間を活用して、アメリカ進歩主義教育の理念を、社会性や市民性の育成（教会・コミュニティとしての講堂）、教えと学びの改善（劇場としての講堂、ミュージアムとしての講堂）、その両者を視野に入れたコミュニティと結びついた学校の実現（コミュニティとしての講堂）といった諸点において実現しようとしていたことを論じた。講堂における教育の目的、内容、方法、連携した機関・人物などは多岐にわたり、講堂の活用やその特徴が以上の四点に尽きるわけではもちろんない。ここでは取り上げられなかったことも含めて、講堂を中心とする教育活動について、より包括的かつ具体的に考察し、アメリカ進歩主義教育の中で推進された学習環境の改善を軸とする学校改革やカリキュラム改革について理解をさらに深めることが残された課題である。

付記：本稿は、平成25年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）による研究「20世紀初頭のアメリカの小学校における講堂と多目的室の出現過程に関する史的研究」（研究代表者：宮本健市郎、課題番号：23531031）の成果の一部である。

#### 注

- 1 本稿は、日本教育学会第72回大会（2013年8月29日、於・一橋大学）にて行った一般研究発表「アメリカ進歩主義教育における講堂を活用した集会活動—1910年代のニューヨーク市を中心として—」に加筆修正したものである。
- 2 ニューヨーク市におけるゲーリー・プランの導入に特化した論考としては、たとえば次の研究がある。Bonner, M. W., *The Politics of the Introduction of the Gary Plan to the New York City School System*, Unpublished Doctoral Dissertation, Rutgers University, New Brunswick, NJ, 1978. 近年にも次のような研究が著されている。Weiner, Melissa F., “Resources, Riots, and Race: The Gary Plan and the Harlem 9,” in *Power, Protest and the Public Schools: Jewish and African American Struggles in New York City*, New Brunswick: Rutgers University Press, 2010, pp. 34–71.
- 3 ここでいう「レクリエーション的」の原語は、“recreative”であり、“recreational”とは使い分けられている。“recreational”が「娯楽の、気晴らしになる」といったことを意味するのに対して、“recreative”は「元気を回復させる」、「再び創り出す」といったことを意味する。「より高い次元における喜びやくつろぎ」という意味に、より合致しているのが、“recreative”であるといえる。
- 4 学校芸術連盟（School Art League）は、公立学校の児童生徒や教師に芸術教育を行うことを目的として、1909年にニューヨークに創設された。ニューヨーク市教育委員会とも連携をとって、とくに公立高校に対して教育プログラムや奨学金を提供した。<http://www.schoolartleague.org/schoolartleague/Home.html> 2013年7月17日アクセス。
- 5 そのような講堂における学習活動は、様々な障害があるために必ずしも十分に展開されたわけではなかった。コートの置き場所、席のサイズ、換気、配電盤、遮光、すきま風、コンセント、支柱といった講堂の物的環境や、教師の不足のような人的環境の問題が指摘されている。その他、カリキュラム編成上の問題として、複数の学年に対応した内容の準備、講堂での活動に適した授業時間の設定、講堂を入れ替わり立ち替わり様々なグループが使用することによる混乱なども指摘されている（Taylor 1916b: 16）。

- 6 『学校集会』でも引用されている主著『学校やその他の場所における祝祭と演劇』の中でチャップは、身振りや言葉で表現される喜びである“delight”，その“delight”よりもさらに大きく深い喜びである“joy”，大勢の人と分かち合う喜びである“rejoicing”など、様々な「喜び」に言及し、その教育的意義を主張している（Chubb 1902: xviii-xix）。
- 7 ハーツの『子ども教育劇場』も『学校集会』において、講堂を活用した「劇化」に関する参考文献の一つにあげられている（Nifenecker 1917: 58）。
- 8 同連盟は、ロシア人やポーランド系ユダヤ人の移民のアメリカ化を目的として設立され、宗教活動部門、家政学部門、到着したばかりの移民のための英語の授業、娯楽部門などから構成されていた（Herts 1911: 3）。
- 9 ここでいう「劇場としての講堂」と、本稿の「はじめに」で指摘したバロウズの「劇場としての講堂」論の関係や相違などについては稿を改めて検討する。
- 10 たとえば『明日の学校』では、「健康キャンペーン」以外に、「清潔な牛乳キャンペーン」や「ハエ撲滅キャンペーン」の例が取り上げられている。その「清潔な牛乳キャンペーン」では、「生徒たちは家庭から牛乳の標本をもってきて検査し、もし不純物が見つかったときには、親たちが何らかの措置をした」。ここでは家庭での食生活の改善に取り組んでいる（Dewey and Dewey 1915: 154-155）。
- 11 1917年には、84の公立学校が1131回、約6万3千枚のスライドを借り出した（Sherwood 1927: 327）。
- 12 講義のテーマとしては、「1. 平時における西ヨーロッパの紛争地帯」、「2. パナマ運河」、「3. 私たちの森とその利用」、「4. 私たちの公園の鳥」、「5. 南アメリカの旅」、「7. 口腔衛生」、「8. ニューヨーク州の小産業」、「9. 私たちの食糧供給源」、「10. メキシコ」などが用意されていた（Nifenecker 1917: 19）。

#### 文献

- The American Museum of Natural History, Department of Education, *Lecture Sets for Public Schools Use*, Catalog No. 2, New York: The American Museum of Natural History, 1916.
- Chubb, Percival, *Festivals and Plays in Schools and Elsewhere*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1912.
- Cohen, Michele, “Dawn of a New Century: C. B. J. Snyder, Master Builder and Art Patron,” Michele Cohen, photographs by Stan Ries, *Public Art for Public Schools*, New York: Monacelli Press, 2009, pp. 32-53.
- Cohen, Ronald D., *Children of the Mill: Schooling and Society in Gary, Indiana, 1906-1960*, New York: Routledge, 2002.
- Dewey, John, “The School as Social Centre,” in *National Education Association, Addresses and Proceedings*, 1902, pp. 373-383.
- Dewey, John and Evelyn Dewey, *Schools of Tomorrow*, New York: E. P. Dutton & Company, 1915.
- Herts, Alice M., with an Introduction by Charles W. Eliot., *The Children's Educational Theatre*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1911.
- Nifenecker, Eugene A., *The School Assembly: A Handbook for Auditorium Exercises*, Department of Education, The City of New York, Division of Reference and Research, Publication No. 15., 1917.
- 宮本健市郎「アメリカ進歩主義教育運動における学校建築の機能転換—教師中心の教場から子ども中心の学習環境へ—」平成20年度～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書『新教育運動における学校空間の構成と子どもの学習活動の変化に関する比較史的研究』（研究代表者：渡邊隆信）2011年、5-28頁。
- Rossmann, John G., “The Auditorium Period as Operated in Gary, Indiana, I · II · III,” *The Journal of Educational Method*, Vol. IV, 1924, pp. 103-109, 147-152, 194-199.
- 佐藤隆之「20世紀初頭のアメリカ進歩主義教育における講堂の出現と活用—集会活動に基づくカリキュラム改革—」早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究—人文科学・社会科学編—』第61号、2013年、141-154頁。
- Sherwood, George H., *The Story of the Museum's Service to the Schools: Methods and Experiences of the American Museum of Natural History*, New York: The American Museum of Natural History, 1927. (Reprinted from *Natural History*, Vol. XXVII, No. 4, 1927, pp. 315-338.)

Taylor, Joseph S., "A Report of the Gary Experiment in New York City," *Educational Review*, Vol. LI, January-May, 1916a, pp. 8-28.

Taylor, Joseph S., *Duplicate Schools in the Bronx*, New York: The Board of Education, 1916b.